

## たくさんの素晴らしい人の縁に感謝

大阪市立総合医療センター 新生児科 岩見裕子

大学を卒業してから、気付けば20年以上の月日が流れています。自分の感覚では卒後10年ほどで時間が止まっているように感じますが、振り返ると本当にあっという間でした。とくに卒後十数年は、がむしゃらに仕事に向き合い続けていた時期だったように思います。

私の原点は、高校時代に1年間滞在したカナダ・ウイニペグの寄宿学校にあります。進学校だったため課題も多く、大学受験期さながらに勉強しながら、季節ごとのスポーツチームにも所属し、濃密な日々を過ごしました。医学部を志す友人も多く、「いつか一緒に働けたらいいね」と語り合ったことも覚えています。海外で仕事をするという漠然とした憧れは、この時期に芽生えました。

医師となった初期研修では、新制度が始まって間もなく指導医の先生方も試行錯誤の中、各科で多くの経験を積みながら毎日が本当に慌ただしく、海外のことを考える余裕はありませんでした。その後、新生児医療の魅力を教えてくださった先生方の影響もあり、自然な流れで道が開け6年目以降も現在の病院で新生児科研修を続けることになりました。

転機となったのは、6年目の冬に参加したHot Topics in Neonatology (ワシントン D.C.) です。自施設から1人で参加した私に、会場で出会った日本の先生がかけてくださった一言、「興味があるなら、海外研修を考えてみたらどう？」その言葉が、心の奥底に眠っていた高校時代の思いを一気に呼び覚ましました。帰国後、タイミング良くトロント大学の新生児部門教授が大阪へ講演に来られました。海外行きの気持ちが最高潮だった私は、自分から積極的に話しかけ、「見学だけでも行きたい」と懇願。最初は軽く流されていましたが、しつこく話し続けているうちに経歴を尋ねられ、気付けばプチ面接のような状況になっていました。最後には名刺をいただき、「本気なら見学ではなくフェローとして応募しなさい」と背中を押されたのです。

そこからは一気に走り出しました。申請書類の準備、英会話教室通い、ワシントンで出会った先生の紹介で受講したハーバード大学の臨床研究コース。あの時期の熱量は、今振り返っても特別なものでした。そして、2013年、トロント小児病院、Mt.Sinai 病院、Sunnybrook 病院での3年間の臨床フェロー生活が始まりました。

多職種が明確な役割をもって治療に参加するカナダでは、フェローは各職種の意見を取りまとめ、責任を持って治療方針を決めるリーダーとしての姿勢が求められました。医師自身が手を動かして働き続ける日本のスタイルとは大きく異なり、戸惑いとカルチャーショックの連続でした。上手いかず落ち込むことも多く、逃げ出したい気持ちになったこともあります。それでも、自分の後に続く日本人医師の道を閉ざしてはいけないという思いが、踏みとどまる力になりました。そんな中、同プログラムを修了後現地の大学院に進学されてい

た日本人医師ご夫妻には仕事面・生活面の両方で支えていただき、同僚や他職種スタッフとの関係も深まり、最終的には充実した日々を送ることができました。臨床面では、日本の新生児医療のレベルが高いことをあらためて実感する一方、多国籍都市ならではの文化や宗教、倫理観、医療制度の違いといった”医療の背景にある世界”を学ぶことができたのは、非常に貴重な経験でした。

帰国後はトロントで出会った夫と結婚し、元の職場での日々が再開しました。忙しさは変わらずとも、以前より落ち着いたペースで仕事に向き合えるようになり、視野も広がったように感じています。

ここ数年は、大阪府下 NICU 主催の新生児教育セミナーでキャリアに関するワークショップを担当することも増え、これまでの歩みを振り返る機会が多くなりました。さまざまな先生方の話を伺う中で強く感じるのは、歩んできた道も、大切にしている価値観も、人によって本当にさまざまであるということ、そしてそのどれもが、かけがえのないその人自身のキャリアであるということです。仕事に全力で突き進む時期もあれば、家庭や生活を優先し、淡々と日々を積み重ねる時期もある。けれどどんな状況であっても、その時々”環境の中で”今、自分にできること”を丁寧に続けること、これは皆さんに共通している姿勢だと感じています。

私自身、特別な才能があったわけでも、海外を目指して一直線に歩んできたわけでもありません。振り返れば、どれも小さなきっかけの連続で、重要だったのは「やってみたい」と心が動いた瞬間に、一步踏み出せたかどうか。そしてその背中を押してくれたのは、いつも”人の縁”でした。若い医師や学生のみなさんにお伝えしたいのは、人の縁に感謝し、そのつながりを大切にすることの大きさです。迷ってもいいし、遠回りしても構いません。ただ、その時々の人との出会いが運んできたチャンスに、そっと手を伸ばせるかどうか、それが未来を大きく変えてくれるのではないのでしょうか。

周産期医療は、厳しさの中に、かけがえのない喜びと学びが詰まっています。どうか皆さんも、自分らしいペースで歩きながら、心が動いた瞬間と、人との縁を大切にしてください。きっとその積み重ねが、思いもよらない未来に繋がっていくはずですよ。

[著者略歴] **岩見 裕子** (いわみ ひろこ)

大阪府出身

2005年 大阪市立大学（現大阪公立大学） 卒業

2005年 兵庫県立西宮病院 初期研修（6か月間 兵庫県立こども病院ローテート）

2007年 大阪市立総合医療センター レジデント（小児科研修）

2010年 大阪市立総合医療センター シニアレジデント（新生児科研修）

2013年 大阪市立住吉市民病院 専修医

2013年 トロント大学医学部小児科新生児部門 クリニカルフェロー（トロント小児病院、Mt.Sinai 病院、Sunnybrook 病院）

2016年 大阪市立総合医療センター 医長

小児科専門医・指導医、周産期専門医（新生児）・指導医

ハーバード大学 Principle and Practice of Clinical Research 2013年コース修了

～DEI 推進委員会より～

## 人との縁が未来を拓く

キャリアとは決して一直線ではなく、人との出会いや心の動きによって形づくられるものです。本エッセイでは、海外研修への思い切った挑戦や異文化の中での葛藤が率直に描かれ、その一つ一つを支えた「縁」の力が強く印象に残ります。成功談に留まらず、迷いや不安も含めて語られているからこそ、私たち自身の進路や生き方と照らし合わせることができます。今できることを丁寧に続ける姿勢と、人との縁を大切にしたいという想いが、新しい未来の扉を広げるチャンスとなることを、本エッセイは私たちに教えてくれます。

責任編集  
DEI 推進委員会